パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

185 世界に飛び出した畳縁（2023 年８月 15 日）

パリにある手芸店で、和風の柄で筒状になった幅８センチほどのテープが売られていました（写真右。広げた状態の畳縁（たたみべり）は、写真下）。よく見ると日本製で、「畳縁」と書かれています。日本の伝統的な建築に使われる畳縁が、手芸用品として売られているのです。

日本で、畳縁で作ったバッグや小物入れ（写真左）を見かけたことはありました。しかし、手芸用品としてロール状の畳縁が売られているのを見たのは初めてで、しかもフランスに輸入されていると知ってとても驚きました。お店の方によると、フランスには日本文化に関心を持っている人が多くいるので、畳縁は人気があるそうです。

畳縁の重要性や役割を理解するために、最初に畳の作りについて簡単にご説明します。畳は、畳床と呼ばれる木材に、い草を織った敷物である畳表を張り付けて作ります。畳表を畳床に止めるために、畳の長い方向に、帯状の畳縁を縫い付けることが一般的です。畳縁は、無地のものもありますが、柄が入ったものが多くあります。和室に畳を敷くときには、何枚かの畳を縦方向又は横方向に敷きます（写真右上）。畳縁は、畳と畳の間の隙間をなくし、畳を保護する役割を持ち、見た目を美しくします（写真右は畳縁の拡大図）。

畳の大きさは、短辺が三尺で長辺が六尺というのが基本です。一尺は約 30 センチに相当しますので、一畳は約 90 センチ×約 180 センチが基本的なサイズで

すが、地方によって若干大きさが異なります。昔の日本の住宅では、畳を敷いた部屋がありましたが、現代では畳敷きの和室がある住宅は少なくなりました。それでも、畳は部屋の大きさを示す物差しとして、今でも使われています。住宅の部屋の大きさは、平米（平方メートル）で示すほかに、四畳半の部屋や十畳のリビングという説明も可能です。畳が敷かれた和室でなくとも、四畳半の部屋というと、日本人は大体の大きさをイメージすることができます。

身分制度があった時代には、身分によって使うことができる畳縁の柄が決まっていましたが、現代ではそのような決まりはありません。伝統的な柄の畳縁には、菱形や六角形を使った幾何学的な模様が多くありました。しかし、手芸店に並んでいる畳縁の柄は実に様々です。カラフルで、赤や黄色などの明るい色のものがあり、水玉模様や花柄などもあります。手芸用として、次々と新たなデザインの畳縁が作られています。畳の需要が減って元々の役割を果たす畳縁は減っても、畳縁はポップなアイテムとなって世界に飛び出し、フランスで広まりつつあります。

もし実際に畳の部屋に入ることがあれば、一つだけ注意をしてください。畳の上を歩くときは、靴を脱ぎ、畳縁を踏まないのがマナーです。機会があれば、本来の役割を果たしている畳縁もご覧になってください。畳縁は、洗練された職人技と日本の文化遺産がわかるだけではなく、伝統的な部屋の雰囲気に美しさと機能性をプラスしています。